

関係断絶期のスペイン認識

——情報と史料の類型

椎名 浩

はじめに

報告者は、16世紀から現代までの日西関係史を概観した2015年の共著書⁽¹⁾で、1624年のスペイン船来航禁止から、1868年の日西修好通商条約締結までの時期（以下「関係断絶期」）を扱う個所の執筆を担当した。

240年あまりにおよぶこの関係断絶期は、実のところ400年余の日西関係史のうち最長の期間である⁽²⁾。とはいえスペインとの外交・通商・人物往来などは断たれているから、この時代についてはスペインについての情報伝達のあり方、それを通じてうかがえる日本人のスペイン認識といったところを中心に記述せざるを得ない。報告者はこのような見通しのもとに関連史料・文献を探索し、その時点で入手・参照したものをもとに共著書第4章⁽³⁾、それと前後して論文数点⁽⁴⁾を執筆した。

通史的著書の執筆という、いわば必要に迫られて着手した作業であったが、その過程で報告者には、「関係断絶期のスペイン情報伝達（広くは鎖国期の海外情報・認識）」そのものが重要で魅力的なテーマに思われた。また時間的制約や紙幅の都合で上記共著書に反映できなかったものにその後入手したものを加え、関連史料・文献も一定量が蓄積された。そこで報告者は、これらの史料を分析対象に上記テーマを考察する何らかの著書を執筆できないか、と思い立った。この「著書」は目下あくまで構想の段階であるが、今回オンライン研究会で報告の機会をいただき、本報告をこうした「構想」を多少とも具体化するための、予備的な作業の場とさせていただく。

ところで報告者はこれまで、関係断絶期の日本でスペインに何らかの形で言及している事例とその記事を、可能な限りを幅広く集める作業を優先してきた。だがこのままで何かを執筆したとしても、それは「情報（記事）の羅列」にすぎないとのそしりを免れまい。そこで報告者は遅まきながら、これら諸史料を類型化する作業に着手した。ところが作業を進めるうち、史料類型の考察は、史料がもたらす情報自体の類型論と密接不可分だという事に思い至った次第である。

そのようなわけで、本報告ではまず1節で、関係断絶期の日本にもたらされたスペイン情報の類型化を行う。続く2節で、おもに情報源（「情報」との混同を避けるため、以下これを「ソース」とする）に着目しながら、関連する史料の類型化を試みる。本報告の作業は、想定している「著書」で言えば「序論」あるいは「序章」の内容にあたるだろう。

本報告の内容は実質的に以上の2点（情報論・資料論）に尽きており、報告題の「認識」は、両者の上位概念として便宜上掲げたというのが偽りないところである。だが3節では、スペイン情報を他の海外（欧米）情報と比較した場合の特徴、およびそれが鎖国期日本の海外情報・対外認識全体の理解に貢献しうる点についても若干の考察を加え、本報告のまとめとしたい。

(1) 坂東省次、椎名浩『日本とスペイン 文化交流の歴史』原書房、2015年。

(2) 近世初期の関係史は平戸（松浦氏）とマニラ総督府の通交（1584年）あるいは豊臣秀吉のマニラ朝貢要求（1592年）から数えれば30～40年、ガリシア出身の航海士ペロ・ディエス（1544頃）、ザビエル、トーレスらの来航（1549年）といった人物往来にさかのぼっても80年前後。一方明治以降の関係史は150年余を刻んだところである。

(3) 『日本とスペイン 文化交流の歴史』第4章「鎖国時代のスペイン情報」（155-184頁）。ここでは『和蘭風説書集成』『呂宋覚書』『華夷通商考』『西洋紀聞』『采覧異言』『泰西輿地図説』『訂正増訳采覧異言』『金城秘鞆』（引用順）を参照した。

(4) 拙稿「オランダ風説書におけるスペイン関連記事」『スペイン学』15、2013年。「江戸期地理書におけるスペイン関連記事」『スペイン学』17、2015年。『『甲子夜話』における海外関連記事—スペイン・ルソン関連記事を中心に』『スペイン学』18、2016年。『甲子夜話』を除けば、これらの論稿で参照した史料は、上記共著書と重複している。

なお、報告者がこのテーマで考察の対象とする「スペイン」は、以下のニュアンス（意味のゆれ）を含む。

- ①現在のスペイン国に相当する領域
- ②史料上「イスパニヤ」（「伊斯波尼亞」「西班牙」ほか）と言及される国
- ③史料上の「南蛮」「南蛮国」のうち①と解釈される事例
- ④当該時代に①の支配下にあった領域、とくに日本関係で重要なフィリピン（史料上の「ルソン」「呂宋」ほか）とメキシコ（「ノビスパン」「濃毘数般」ほか）

このうち、一般的には同一視されている①～③の意味するところについても議論の余地があるが⁽⁵⁾、これについては別の拙稿⁽⁶⁾で考察しているので、本報告ではあえて深入りしない。よって本報告での「スペイン」は基本的に①の意味であり、適宜④にも言及すると理解されたい。また本報告の内容は、2018年6月に京都外国語大学で行われた日本・スペイン外交樹立160周年記念シンポジウムでの報告、およびそれにもとづく2019年の拙稿⁽⁷⁾と一部重複していることをお断りしておく。

1. 情報の類型

形態的類型

本稿でいう「情報」は、最も広義には「関係断絶期の日本にもたらされ、スペインに関して何かを伝えたもの」の総体であり、形態的にはモノ情報、オーラル情報、文字情報、ヴィジュアル情報からなる。このうちモノ情報は、日西交渉のあった時代の著名な例としては、1611年にS. ビスカイノが徳川家康に献上した機械時計（久能山東照宮蔵）が挙げられる。だが関係断絶期においては、フィリピンやメキシコの産物・製品まで考慮すれば皆無とはいえないものの、「情報」として意識的に受け止められたものとしては、無視して差し支えなからう。

また録音技術が存在しない時代であるので、オーラル情報は文字情報やヴィジュアル情報の形をとって伝えられたもの（2節でいう「オーラルなソース」）のみが参照・検討可能である。したがって以下「情報」とは、事実上文字情報とヴィジュアル情報（絵図、地図等）⁽⁸⁾を指す。ただ、こうした利用可能な情報の背後に、「フロー情報」ともいべきオーラル情報が存在したことは認識しておくべきだろう。見方によっては、いわゆる鎖国時代とは、近世初期までは比較的自由に流通していた海外についてのオーラル情報を、入り口を1か所（長崎）とし通詞→長崎奉行→幕府が一元的に管理する体制であり、「いや、もう3か所あった」というのがいわゆる「四つの口」論であるともいえる。

タイムスパンによる類型—共時的情報と通時的情報

こうした情報は、主にタイムスパンに着目すると、共時的情報と通時的情報に大別される。

まず共時的情報は「ヨーロッパ情勢はどのようになっており、その中でスペインはどのような立場か？」といったリアルタイムの関心にこたえたものであり、内容面では政治・外交・軍事といった分野が主になる。一方通時的情報は、「そもそもスペインはどこにあり、その国土はどのような特徴があるのか？」といった、よ

(5) 通常「イスパニヤ＝スペイン」とされ、「南蛮」はこれにポルトガルを加えたものと理解されているが、ローマ時代のヒスパニア Hispania はイベリア半島全体を指し、これから派生した各国語（西 España、英 Spain 他）も、地理的概念としてはポルトガルを含む時期が長く続き、かつそのことが日本での「イスパニヤ」の用法にも反映した。また「南蛮」は元々中華世界観から見た南の「他者」を指す語であり、16世紀以降、東南アジアに拠点を築いたイベリア両国民ひいてはその本国も指すようになった。

(6) 拙稿『「南蛮」「イスパニヤ」「西班牙（スペイン？）』—江戸時代～明治初期のスペイン呼称と意味範囲の変遷についての考察』『スペイン学』21、2019年。また「南蛮」の語の意味変遷については、伊川健二『「南蛮」とは何か』『日本ポルトガル協会会報（創立40周年記念号）』2020年、『「南蛮」におけるスペイン』『スペイン史学会会報』92、2010年も参照。

(7) 拙稿『関係断絶期の日本におけるスペインの情報・知識・関心（1624 - 1868年）』『日本スペイン外交樹立150周年記念シンポジウム 変わりゆく世界におけるスペインと日本』京都外国語大学、2019年。

(8) 文字情報の例である地理書にも地図・絵図が挿入される一方、単体の地図にも地名・国名他の地理情報が書き込まれるなど、両者は実際には相互に入り組んで存在している。

り中長期的な側面への関心ないし知的欲求にこたえたもので、自然、産業、文化、制度、歴史などを内容とする。その意味では、こちらは「情報」というより「知識」というべきかもしれない⁽⁹⁾。

くわえて、スペインのようにかつて日本との交渉があった国に特徴的な要素として、いわば「過去情報」ともいうべきものがある。これは、関係断絶期の通時的情報のうち、とくに歴史に関わる情報の一部をなすが、他方過去における共時的情報の「残像」という見方も可能である。

このような情報の2つまたは3つの類型は、2節でみる「ソース」のあり方、ひいては史料の類型とも密接にかかわっている。

通時的情報と共時的情報の関係

2019年の拙稿で、オランダ通詞がオランダ風説書を作成する過程を例として図解したように⁽¹⁰⁾、海外に関する共時的情報に接した者は、通時的情報を理解・取捨選択のための予備知識・判断材料とする一方、通時的情報が新たに入ってきた共時的情報により、部分的であれ随時修正・更新されていく要素もある。このように、2種類の情報には相互の影響関係がある。

また情報とくに共時的情報の取捨選択は、その時々海外への関心のあり方につよく影響される。スペインについて言えば、鎖国体制（日西関係に即して言えば関係断絶期）当初は、キリシタン問題もからんで、隣国ポルトガルともども、いわば鎖国体制そのものの「原因国」であり、松方冬子氏の言う「カトリックの脅威の時代」⁽¹¹⁾の核心をなす存在であった。こうした脅威感と表裏一体をなす形で、スペイン情勢（本報告で言う「共時的情報」）への日本人（とくに幕府当局者）の関心も高かったと言える。だがその後幕藩体制や日本周辺の国際関係が安定し、スペインのヨーロッパでの政治的地位も低下するにつれて、スペインへの関心もまた低下したのは否めない。19世紀に入り、再び松方氏の表現を借りれば「西洋近代」が脅威の中核となるに至って、自らも近代化に苦悩するスペインの存在は完全に埋没したと言える。換言すれば、スペインは近世日本の対外関心の推移を長期的に見るにあたり、格好の事例を提供しているともいえる。

2. 史料の類型

関係断絶期にスペイン情報を伝えた史料は、情報の出所＝「ソース」によって、海外の事情を知る人物から直接聞いた、すなわちオーラルなソースにもとづくもの（以下これらを「第Ⅰ類型」とする）と、何らかの文字化されたソース⁽¹²⁾（第Ⅰ類型史料の二次的な参照も含む）にもとづくもの（以下「第Ⅱ類型」）に大別される。

1節との関連で言えば、おおむね第Ⅰ類型の史料は共時的情報、第Ⅱ類型の史料は通時的情報に対応しているが、両者が入り組んでいる部分もある。

第Ⅰ類型の史料群

第Ⅰ類型の史料は、ソース提供者（語り手）の属性とソース提供（取得）の方法から、以下のように細分される。

- ①外国人の提供するソースにもとづくもの
 - ア) ソースの提供・取得が制度化されたもの
 - イ) 偶発的に来日した外国人がソースを提供したもの
- ②日本人が提供するソースにもとづくもの
 - ア) 海外渡航経験者の見聞を記録したもの

(9) 拙稿（2019）では、本報告でいう共時的情報を（狭義の）「情報」、通時的情報を「知識」とした。

(10) 拙稿（2019）、236頁。

(11) 松方冬子『オランダ風説書「鎖国」日本が知った「世界」』中公新書、2010年。同書第4章の章題（93頁）は「脅威はカトリックから『西洋近代』へ」。

(12) 1節で考察した情報の形態的類型を踏まえれば、正確には「文字化・ヴィジュアル化されたソース」とするべきであるが、文字資料のみならず圧倒的な情報量を考え、「文字化」に代表させた。

イ) 漂流記録

以下個別に見ていくと、①のうちア)はオランダ風説書⁽¹³⁾に代表される風説書(他に唐船風説書、シヤム風説書など)であり、オーラル情報の独占的な管理という意味で、近世権力と海外情報のかかわりを象徴するものでもある。

またイ)のうち特にスペイン情報とのかかわりで重要な例としては、スペイン継承戦争(1701~14)さなかの1708年屋久島に潜入し、長崎を経て江戸に護送され新井白石の尋問を受けたイタリア人宣教師G.B.シドッティ、および白石がシドッティとのやり取りに触発されて著した『西洋紀聞』⁽¹⁴⁾が挙げられる。

一方②であるが、ア)の例としては、鎖国前にルソンに渡航した経験のある人物からの聞き書きをもとに、1671年に作られた『呂宋覚書』⁽¹⁵⁾がある。『呂宋覚書』の作成は、日西交渉のあった時代のオーラル情報が、当事者の年齢を考えれば17世紀末には枯渇するので、その文字化が急務となっていたこと(逆に言えば、この時期までは通時的情報についても、オーラルなソースが広く活用されていたことを示唆している)、かつこれ以降、通時的情報について文字化されたソースの参照が本格化していく過渡期を示している興味深い。

またイ)には、フィリピン諸島に漂着・帰国するケースが早くからあり、1830年備前岡山の廻船神力丸が難破してフィリピンのパターン島に漂着、翌年帰国した事例などがある⁽¹⁶⁾。また1840年前後からは、太平洋沖で難破した日本船の乗組員が欧米船に救助され、北米太平洋岸(スペイン領→1821年メキシコ独立→うちカリフォルニアは、米墨戦争の結果1848年以降アメリカ領)に着陸・滞在して帰国する例がみられるようになった。1841年、兵庫の廻船栄寿丸が犬吠沖で難波、数名がスペイン船に救助されてメキシコのバハ・カリフォルニア州に上陸、2年後に帰国したのはその一例で、船員への聞き書きを元に『亜墨新話』⁽¹⁷⁾他数点の著作が書かれた。

第II 類型の史料群

「第II 類型」に属する史料は、当然のことながら地理書とくに海外地誌・万国地理書が中心であるが、それ以外にも多様な資料が検討の対象となる。

これらを、参照した文字ソースの言語に即してみると、時代順に一定の流れが見られる。

まず17世紀中~18世紀前半にかけて、『坤輿万国全図』に象徴される漢文の地理情報を主に参照する時期があり、『華夷通商考』⁽¹⁸⁾(1695年初版、1709年増補版)『和漢三才図会』⁽¹⁹⁾(1712)『采覧異言』⁽²⁰⁾(1725頃)などが例として挙げられる。ついで蘭学の普及とともに、18世紀後半からオランダ語が参照されるようになる。同時に新井白石からすでに紹介されていた万国地理観が、他の科学的思考と同様に定着し、記述の正確さ・詳細さも増した。1789年の『泰西輿地図説』⁽²¹⁾、白石の著作に蘭書からの知見を加えた1802年の『訂正増訳采覧異言』⁽²²⁾などはその代表例である。

このように、江戸期全体として見れば、漢学から洋学(蘭学)へという大きな流れに対応してソースの言語も推移しているが、江戸末期、一時的にせよ再び漢文のソースが重視された局面もあった。すなわちアヘン戦争(1840)を機に中国(清)・日本双方で知識人の危機意識、それと表裏一体の欧米諸国の近代的制度・技術

(13) 日蘭学会編『和蘭風説書集成』(上・下)吉川弘文館、1977・79年。風説書研究会編『オランダ別段風説書集成』吉川弘文館、2019年。

(14) 新井白石(宮崎道生校注)『西洋紀聞』平凡社東洋文庫、1968年。

(15) 『呂宋覚書』新村出監修『海表叢書』6。(更生閣、1928年、復刻：成山堂書店、1985年)所収。

(16) 倉地克直「神力丸漂流史料について(1~5)『岡山大学文学部紀要』28-31、35、40、1999-2003年。「漂流民の自他意識—神力丸バタン漂流事件を素材に」岡山大学大学院『文化共生学研究』1、2003年。『漂流記と漂流体験』思文閣出版、2005年。

(17) 山下恒夫編『石井研堂コレクション 江戸漂流記総集』4。日本評論社、1992年。

(18) 西川如見(飯島忠夫・西川忠幸校訂)『日本水土考・水土解弁・増補華夷通商考』岩波文庫、1844年(1998年第2刷)。

(19) 寺島良安(遠藤静雄編)『和漢三才図会』(1、2)『日本庶民生活史料集成』28、29、三一書房、1980年。

(20) 国書刊行会編『新井白石全集』4 国書刊行会、1977年。

(21) 朽木昌綱(朝倉治彦解題)『泰西輿地図説』(蘭学資料叢書7)青史社、1979年。

(22) 山村才助(平野満編)『訂正増訳采覧異言』(上・下)(蘭学資料叢書1・2)青史社、1979、82年。

への関心が高まった。清の思想家魏源が世界地理書『海国図志』（50 巻本 1842、100 巻本 1852）を著す一方、洋書の漢訳も進められた。これらの書物は日本にも輸入されて幕末の思想家に影響を与えるが、地理書の事例としては、箕作阮甫・省吾父子が著した『坤輿図説』²³（正編 1844・補編 1846）が傑出している。なお各国（特に欧米）国名の漢字表記は、この「漢文ソースの第二次受容」というべき時期に変化し、かつそれが明治以降に引き継がれた例が多いようである。たとえばそれまで「伊斯波尼亞」などと表記されていたスペインは、1840 年代あたりを機に「是班牙」「西班牙」（現在一般的な表記）などと書くパターンが増加していく。また幕末開国後は英語の重要性も増すであろう。

スペイン情報を伝える文字ソースの言語としては、上記の諸言語に加え日本語も重要である。鎖国期の外国に関する文字ソースが「日本語」というのは奇異に感じられるかもしれないが、これは実のところ、過去のスペインとの交渉を伝えるもの（1 節の「過去情報」に対応）であり、具体的には各地の古文書、伝承などである。ポルトガルと並んで鎖国以前に関係史があったスペインならではの要素ともいえる。このソースを用いている史料も多様で、西川如見が地元長崎の地誌を著した『長崎夜話草』²⁴（1720）、18 世紀半ばごろに兵法家村井昌弘が著した島原の乱の軍記『耶蘇天誅記』²⁵、仙台藩の正史である『伊達治家記録』のうち、伊達政宗の事績を記録した『貞山公治家記録』²⁶（1686）での、ビスカイノとソテロの謁見記録、また 1812 年、仙台藩から慶長遣欧使節史料の閲覧を許された大槻玄沢が、『治家記録』も参照しながらその分析を試みた『金城秘韞』²⁷が例として挙げられる。

3. 情報・史料とのかかわりでの、スペインの位置づけ・特徴

片桐一男氏は 2019 年の論文で、江戸時代日本にもたらされた海外情報を以下のように分類している²⁸。

（一）定期情報

1. 唐風説・唐風説書
2. 阿蘭陀風説・阿蘭陀風説書

（二）不定期情報

1. 来日外国人からの情報
2. 漂流帰還人による情報
3. 書物・地図による情報

片桐氏の分類に本報告で行った類型化を当てはめるならば、（一）および（二）の 2 ままで「共時的情報」に関わる「オーラルなソース」、（二）の 3 は「通時的情報」をもたらず「文字化されたソース」に対応するだろう。片桐氏は、（二）についてはそれらが史料の形で残されたところには言及していないが、この点をあえて補足すれば、（二）の 2 ままで本稿でいう「第Ⅰ類型」、（二）の 3 は「第Ⅱ類型」の史料に反映していることになる。

本報告で行った情報・史料の類型化は、大筋では片桐氏に代表される、近世日本の海外情報についての一般的理解からさほど隔たっていないように思われる。逆に言えば、報告者が関係断絶期にスペイン情報を伝えた事例を集め分類したもののうち、この分類中に見いだせない類型および事例があれば、それがこの時代のスペイン情報の特徴を示すことになるだろう。

²³ 箕作省吾・箕作阮甫（小泉吉永解題）『坤輿図説』（正編・補編）（江戸時代庶民文庫 55・56）大空社、2015 年。

²⁴ 西川如見（飯島忠夫・西川忠幸校訂）『町人囊・百姓囊・長崎夜話草』岩波文庫、1942 年（2000 年第 5 刷）。

²⁵ 清水紘一『『耶蘇天誅記』の基礎的研究』『研究キリシタン学』5、2002 年。「江戸中期のキリシタン研究—村井昌弘著『耶蘇天誅記』前録から」森安彦編『地域社会の展開と幕藩体制』名著出版、2005 年所収。岡部敏和「耶蘇天誅記から探る「天草・島原の乱」—耶蘇天誅記巻之一の検証から』『史料研究』1、2004 年。山本英貴「耶蘇天誅記にみる松倉藩」『史料研究』1、2004 年。

²⁶ 平重道編『伊達治家記録』（仙台藩史料集成）2、3。宝文堂出版、1973 年。

²⁷ 大槻茂雄編『磐水存響』乾巻、1912 年（復刻）思文閣出版、1991 年。

²⁸ 片桐一男「江戸時代の海外情報—鷹見泉石の情報活動」『オランダ別段風説書集成』、538-9 頁。

具体的に言えば、1節で述べた「過去情報」、2節で言えば第I類型の史料群のうち②のア)が該当する。同時にそのことが、スペインがポルトガルとともに鎖国以前に接触・交流の歴史を持ち、しかも鎖国体制自体、この両国の排除と密接に関連していた経緯に起因することも、容易に理解できる。

一方第II類型史料のうち、日本語のソースにもとづくものの存在も、同様の文脈でスペイン情報の特徴を示しているだろう。また一般的に海外情報に関する史料や著作は、長崎など対外関係の窓口か、江戸・上方など政治・文化・学問の中心地に集中する傾向が強いのに対し、(主に過去の)スペイン情報を伝える史料が、西南日本から東北日本太平洋岸までの、比較的広い範囲に散在していることも特徴の一つと言える。

以前からの関係史があり、脅威という形での強い関心とともに鎖国時代に入ったスペインの事例が、近世の海外情報・対外認識全体の理解に貢献する点は、以下の2点に要約されよう。一つは1節の繰り返しになるが、近世全体を通じた対外関心の変化の過程を跡付けるうえでの好事例である点。もう一つは、近世のある時期から海外の地理・歴史についての理解が深まる中、過去の対外関係、その際に伝わった外国情報などが、どのように「再理解」されたかについての、興味深い事例を提供している点である。

主要参考文献

*本文中で引用・注記したものは省略した。

坂東省次「日本におけるスペイン学の歩み」『スペイン関係文献目録』行路社、2005年所収。

坂東省次、川成洋編『日本・スペイン交流史』れんが書房新社、2010年。

開国百年記念文化事業会編『鎖国時代日本人の海外知識』乾元社、1953年。【復刻盤】原書房、1978年。【近代名著解題選集】クレス出版、2006年。

荒野泰典「近世の対外観」『岩波講座 日本通史 13 近世 3』岩波書店、1994年。

岩下哲典、真栄平房昭編『近世日本の海外情報』岩田書院、1997年。

三好唯義「『三国』から『五大陸』へ」『日本の対外関係 6 近世的世界の成熟』吉川弘文館、2010年。

岩崎奈緒子「世界認識の転換」『岩波講座 日本歴史 13 近世 4』、2015年。